

Newsletter 40

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第40号/2022年5月16日発行

Contents

- 巻頭言 「共苦」のゆくえ
- 特集Ⅰ 「創造力とコミュニティ研究会」「法学部 武藤浩史教授 最終講義」
「学習相談」
- 特集Ⅱ 「選書刊行記念企画」「選書新刊紹介」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター設置科目】 ゲーム学
実験授業 エンターテインメントビジネス論
- 特集Ⅳ 「情報の教養学」「日吉行事企画運営委員会 (HAPP) 企画」
- 特集Ⅴ 「研究の現場から」
- 活動予定
- 私の〇〇自慢



ウクライナのひまわり畑。《パルジファル》で起こる「共苦」の気づきは、再生する自然がもたらす治癒作用でもある。

「共苦」のゆくえ

教養研究センター副所長
高橋宣也 (文学部)
Nobuya Takahashi

3月の初め、琵琶湖畔のホールまでひとり車を飛ばして、ワーグナーのオペラ《パルジファル》を観ました。舞台演出を伴わない演奏会形式で、癒しがもたらされる至福の終幕に涙しました。聖杯伝説に基づくこのオペラは、他者の艱難に共感し、ともに苦しむことを知ること英知と救済を得るという物語で、観る人を疑似宗教的とも言える法悦に誘います。この「共苦」の理念を、ワーグナーは救いの希望として提示したのでした。しかしその内容はミステリアスで議論を呼ぶところでもあり、狭い宗教集団、あるいは種族の優越性を強固にするものだという批判もあります。

「ともに」という言い方は、ともすれば同志でない者を区別する思考と表裏一体にもなります。そうした仲間意識を、音楽は増強します。「若き血」を歌えば塾生魂で熱くなるように、人は自分の所属する組織や国や民族にまつわる音楽を大切にしてきました。そして音楽は、人間の情動に直接働きかける手段として、また文化の看板として、為政者たちに利用されてもきました。ナチスがワーグナーを称揚したのはよく知られていますが、彼らは一見天真爛漫なモーツァルトまで、アーリア民族の美の典型に仕立てようとしてきました。音楽と政治的忖意の間には、切っても切れない歴史が

あります。

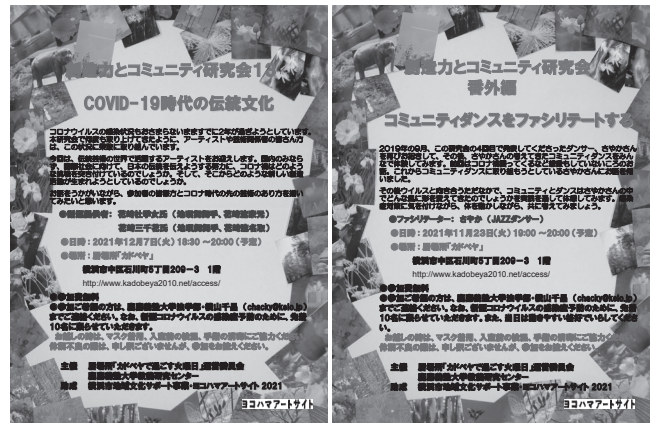
「ナショナリズム」という語ほど、和訳に悩む言葉はありません。近代的な国の概念を立てれば「国家主義」とか「国粋主義」となるし、人に重きを置けば「民族主義」とも「愛国心」ともなる。「ネイション」は「国家」でも「国民」でも「民族」でもある。訳語の選択でイメージが相当に変わりますから、文脈を慎重に読み込んで適切に判断せねばなりません。19世紀後半にはヨーロッパ諸地域で「ナショナリズム」が高まりましたが、その一翼を担ったのも音楽でした。作曲家たちは自分の民族の文化や歴史に根差した題材や音楽語法を探って表現し、それは民族的アイデンティティの形成、ひいては国家統一や独立につながることもありました。

スメタナがチェコ民族の歴史と営みを音で描いた「我が祖国」を聴くと、私はその時だけは自分はチェコ人なのではないかと思うほどに感動します。音楽は国境のない言葉だというのは、クリシェではなく真実だと実感します。己であることを突き詰めると普遍に至るといふ、認識の境地とまで言ったらさすがに大げさですが、しかし《パルジファル》でも、主人公は極めて個人的かつエロティックな体験の瞬間を契機に、他者の苦悩を啓示的に知るので。国にせよ民族にせよ、そして個人においても、自己の価値に自覚と誇りを持つことと、他者の尊重とは背反ではないはず。排他ではなく、共苦と共感を育むのが音楽の本質だと信じています。



「創造力とコミュニティ」研究会

2021年度も新型コロナウイルスの威力は収まることなく、東京オリンピックを目前にして緊急事態宣言が発令されることとなりました。2020年度の夏には日本でも芸術文化の支援策が講じられましたが、その効果はどのようなものであったのでしょうか。終わりの見えないコロナ禍の中で、芸術家たちはどのように活動してきたのでしょうか。今回はその視点から2回の研究会を開催しました。1回目は今までの話し合いによる研究会とは異なる試みとして番外編「コミュニティダンスをファシリテートする」を11月23日に開催。2019年9月に本研究会で発表なさったダンサーのさやかさんを再びお迎えして、その後の活動の一端を、ダンスワークショップを交えて発表していただきました。今回は好きな言葉、普段の動きをそれぞれの参加者に出していただき、そこから一連のダンスを生み出すコミュニティダンスの手法が披露されました。また、12月7日には第13回目目の研究会として、「COVID-19時代の伝統文化」



のタイトルのもとに、地唄舞の舞手、花崎杜季女氏と花崎三千花氏をお迎えし、コロナ禍での日本の文化政策と、国の支援からは独立したアーティスト独自の連携と伝統の継承の取り組みについてお話しいただきました。(横山千晶)

法学部 武藤浩史教授 最終講義

2022年2月3日、武藤浩史教授（法学部）の最終講義が教養研究センター主催で行われました。会場の来往舎シンポジウムスペースはウイルス感染対策の制限内ながら満員、またオンラインでも生配信され、こちらの参加者も多数を数えました。武藤教授は法学部日吉主任等を歴任されると同時に、教養研究センターでも副所長を務められ、「身体知」の授業を展開されるなど、長くセンターの活動の大きな力でした。

演題は「モダニズム文学のスピリチュアリティーズ」で、武藤先生が専門とする近代イギリス文学の作家、D・H・ロレンスに見られる女性によるスピリチュアリティの拡大や、ジェイムズ・ジョイスにおける、自己への配慮と他者へのケアが人の幸福へと結びつく様に着目する新しい読みが提示されました。こうした読解を基盤として、西洋近代

の思想において「神が死んだ」後には、伝統的な宗教の既成の教義ではなく、宗教的体験が重視される知的状況を明らかにして、フーコーが唱える霊性の議論などを軸に、従来の信仰の枠組みにとらわれない、新しい精神性の視座を探り、確立しようという、壮大な構想が示されました。退職後もますます深まるであろう思索への期待を抱かせ、歩みを止めない、豊かな教養ある研究者の姿を残していかれました。活発な質疑応答もありました。

(高橋宣也)



学習相談

2021年度活動報告

今年度もコロナ禍での活動ではありましたが、対面授業が一部再開し図書館への来館者が増え、昨年度より多くの相談者がいらっしました。レポートの書き方に関する質問が多く、相談者と同じ学生であることを活かし、親しみを感じてもらえるよう相談に対応いたしました。また、今年度はインスタグラムを開設しました。来年度はSNSを



通して積極的に情報発信を行い、より多くの学生に学習相談を活用していただけるよう努めます。レポート課題を出す際には是非、学習相談を勧めていただけると幸いです。

(理工学部3年 川崎三葉)

※学年は2021年度のもの

<選書刊行記念企画> 著書と読む教養研究センター選書

第2回「コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力」

拙書『コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力』が刊行されたのは2021年3月のこと。その時はこれほどコロナ禍が長引くとは思ってもみませんでした。また、オリンピックを始めとし、国際的なイベントや大勢の観客を集めるコンサートや演劇の開催の在り方にも大きな変革が訪れています。今回の選書企画はハイブリッドで行わせていただきました。選書が出されてからすでに1年近くがたっていることから、最初に要点をまとめるために、本書のテーマとした「パブリック」「アート」「コミュニティ」の3つのキーワードを中心にお話をさせていただきました。話の中では本書で考察したこと・したかったこと、および出版後の社会や芸術の動きについてもあらためて考察させていただきました。コメンテーターにはアートNPOのSTスポット理事長の小川智紀氏、および教養研究センター所長で舞台芸術に造詣の深い理工学部の小菅隼人氏をお迎えしましたが、それぞれの立場から「パブリック」や「アート」の意味と役割についてご指摘いただき、その後、「アートはこれから生き残れるか」、「ポスト・コロナのコミュニティの姿」について3人で、ディス

カッションを行いました。オンラインのチャットでも、各自が考えるアートの役割と意義について多数の意見が投稿されました。また会場からは、「分断の蔓延する現代社会の中で、秩序は可能か」、「小さなコミュニティは社会性を必要とする大きな体制の中で、補助的な役割を果たすに過ぎないのか」といった実に的を射た質問とコメントをいただきました。若い世代が真剣に、二分化が進む社会の現状とその中で自分の役割、およびコミュニティの可能性について考察していることがよくわかり、ポスト・コロナウイルスの社会への希望を見た企画となり、著者としても大きな学びの場となりました。

(横山千晶)

**著者と読む 選書刊行記念企画—
教養研究センター選書**


第2回
コミュニティと芸術
時代に考える創造力
横山千晶

「著者と読む教養研究センター選書」とは：教養研究センター所員が独自の視点から平素なスタイルで綴る。創始者の経験から得たシグナチャーです。歴史の文学、芸術、哲学、芸術表現、社会学など、様々な分野に属する複数の多様な関心を抱いて、多岐にわたって行われています。

「著者と読む教養研究センター選書」とは：「教養研究センター選書」をより広く知ってもらうことを目的として、著者や関係機関と連携し、様々な機会を通じて一冊の選書についてより深く知る機会を提供します。今年度は年度別に行われ「コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力」をめぐります。著者である横山千晶氏、アートと社会の接点を考える立場からアートNPOのSTスポット理事長の小川智紀氏、演劇を専門とする小菅隼人氏が連携し、各自のコメントとディスカッション、および参加者の質疑応答を行います。

選書企画「コミュニティと芸術—パンデミック時代に考える創造力」
2022年度の選書は「パンデミック時代に考える創造力」をテーマとし、私たちの生活や社会に深く関与している。パンデミックの発生以降、私たちの生活や社会は大きく変化した。その中で、私たちはどのようにして生きていくべきか、そして、私たちはどのようにして社会に貢献できるのか、といった問いを投げかけ、その問いに答えるための創造力を求めようとしている。本書は、その問いに答えるためのヒントを提供し、私たちの生活や社会をより良くするための創造力を高めるための一冊である。本書は、私たちの生活や社会をより良くするための創造力を高めるための一冊である。本書は、私たちの生活や社会をより良くするための創造力を高めるための一冊である。

日時：2022年1月14日(金) 18:30～19:30
会場：理工学部 演劇センター 演劇ホール
参加費：無料
申込：先着順
申込締切日：2022年1月13日(木) 18:00
お問い合わせ：教養研究センター 事務局 042-465-1111
申込先：https://www.liberalarts.jp



教養研究センター選書22

『ダフニスとクロエー』の世界像—古代ギリシアの恋物語

ロンゴスの『ダフニスとクロエー』はローマ帝政下にギリシア語で書かれた牧歌的恋物語で、美術・音楽作品を通じてよく知られています。日本では翻訳こそ出ているものの、研究書はなく、欧米でも研究が盛んになってまだ40年ほどです。そのため、他分野の研究の中で言及されることがあっても、物語の表面的な部分しか見ていないことが多いのが長年気になっていました。私は四半世紀余り前の卒業論文で初めて本作品を扱い、英国留学時代にはケンブリッジとウェールズのスウォンジーで、幸いにもロンゴスを含む古代ギリシア恋愛小説研究を代表する先生方から学ぶことができました。さらに近年授業で扱う中で、自らの考えを少しずつまとめて来ました。本書はこうした私のこれまでの歩みと研究のエッセンスを凝縮しつつ、一般向けに読みやすく書いた本になっています。また私自身、現在『ダフニスとクロエー』の新訳を準備しているところで、その先駆けとなる本になればと思っています。

(中谷彩一郎)

《2022年度教養研究センター選書 原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応募資格 教養研究センター所員(共同執筆も可)

■内容 研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■申込締切日：2022年8月30日(火)

■原稿提出締切日：2022年9月30日(金)

●詳細は別途所員宛にご案内しました募集要項をご確認ください。



教養研究センター設置科目



株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座 「ゲーム学」2022年度秋学期開講 実験授業「エンターテインメントビジネス論」

株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座 「ゲーム学」～ビデオゲームについて学ぶ、そして考える

今日、ビデオゲーム、コンピュータゲームはさまざまな分野で重要な位置を占めています。人文科学としては文学や映画に代わる物語伝承メディアとして、あるいはコミュニケーション・ツールとして。産業面では日本の代表的なIP（知的財産）として。技術面ではAIや仮想現実における最先端テクノロジーとして。そんななか、ゲームをアカデミックな研究対象にしたい、あるいは将来、ゲーム業界への就職を考えている塾生も多いはず。今日、義塾にはゲームに特化した学部学科はありませんが、ゲームをアカデミックに考察するための入口として、このたび株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「ゲーム学」を創設しました。ゲームを扱うといっても、個々のタイトルについてのいわゆるゲーム批評、ゲーム考察とは異なります。また、ゲーム学の専門家やゲーム業界関係者にも登壇いただきますが、むしろ本講座が目指しているのはビデオゲームを既存の学問知を通して考えることです。現在、開講準備が進められている「エンターテインメントビジネス論」と合わせ、本講座が義塾におけるゲームの研究教育活動の起点になるようさらなる準備を進めてまいります。（新島進）

2021年度 実験授業「ゲーム学」実施実績

- 10月15日 ゲームとは何か？ 井上明人（立命館大学 映像学部 専任講師）
- 11月9日 なぜゲームに依存するのか 藤田博史（医療法人ユーロクリニック 理事長・精神分析医）
- 11月30日 ミクになり、ミクを演じる、ちょっと楽しい画像解析技術 満倉靖恵（慶應義塾大学 理工学部 教授）
- 12月14日 アニメ産業 20年ぶりの地殻変動とゲーム産業 平澤直（アーチ株式会社 代表取締役）
- 1月19日 中国巨大市場への挑戦 大里雄二（日中エンタメプロデューサー）

コーディネーター：新島進（慶應義塾大学 経済学部 教授）

※肩書は2022年3月現在

2022年度 秋学期「ゲーム学」 各回テーマと担当者（五十音順）予定

- 社会を考えるためのゲーム 井上明人（立命館大学 映像学部 専任講師）
- 脳の学習機構とゲーミフィケーション 牛場潤一（慶應義塾大学 理工学部 准教授）
- 特別講義 襟川陽一（株式会社コーエーテクモホールディングス 代表取締役社長）
- 中国巨大市場への挑戦 大里雄二（日中エンタメプロデューサー）
- 日本のゲーム産業 小山友介（芝浦工業大学 システム理工学部 教授）
- ゲームと文学、テキストと身体性 新島進（慶應義塾大学 経済学部 教授）
- アニメ産業 20年ぶりの地殻変動とゲーム産業 平澤直（アーチ株式会社 代表取締役）
- ゲームとしての人生—その精神分析的構造 藤田博史（医療法人ユーロクリニック 理事長・精神分析医）
- ゲームとアニメのメディアミックス 三原龍太郎（慶應義塾大学 経済学部 准教授）
- ミクになり、ミクを演じる、ちょっと楽しい画像解析技術 満倉靖恵（慶應義塾大学 理工学部 教授）
- バーチャルリアリティの進化、拡張するゲーム体験 南澤孝太（慶應義塾大学 大学院 メディアデザイン研究科 教授）
- 数値で見る「三国志」のリアリズム～序列化されるキャラクター～ 吉永壮介（慶應義塾大学 文学部 准教授）
- フランスにおけるビデオゲーム ロラン・ローベル（慶應義塾大学 商学部 訪問講師）

コーディネーター：新島進（慶應義塾大学 経済学部 教授）

※肩書は2022年3月現在



満倉靖恵氏
(慶應義塾大学理工学部)

実験授業「エンターテインメントビジネス論」

アニメやゲームなどが好きで業界の構造に興味を持っている学生や、卒業後はエンターテインメント業界で働きたいと思っている学生は多いと思います。本講義は、法学・経済学・商学・人文学・理工学など様々な分野に跨がるエンターテインメントビジネスという分野について、主に「アニメ・ゲームIPの作り方」に焦点を当てつつ学びます。受講者は、コンテンツビジネスの様々な仕組みを体系的に学習し、商品を生み出す分析方法を検討する体験も行うことで、クリエイティブ産業の様々な分野にも応用可能な知識と、批判的な思考を身につけます。

2022年度春学期の火曜日6限に、全7回授業として開講しています。授業担当者は、山下一夫（慶應義塾大学 理工学部 教授、実験授業 エンターテインメントビジネス論 コーディネーター）、中山淳雄（株）Re entertainment代表取締役社長・慶應義塾大学 経済学部 訪問研究員、三原龍太郎（慶應義塾大学 経済学部 准教授）、吉川龍生（慶應義塾大学 経済学部 教授）の4名で、スケジュールは右の通りです。

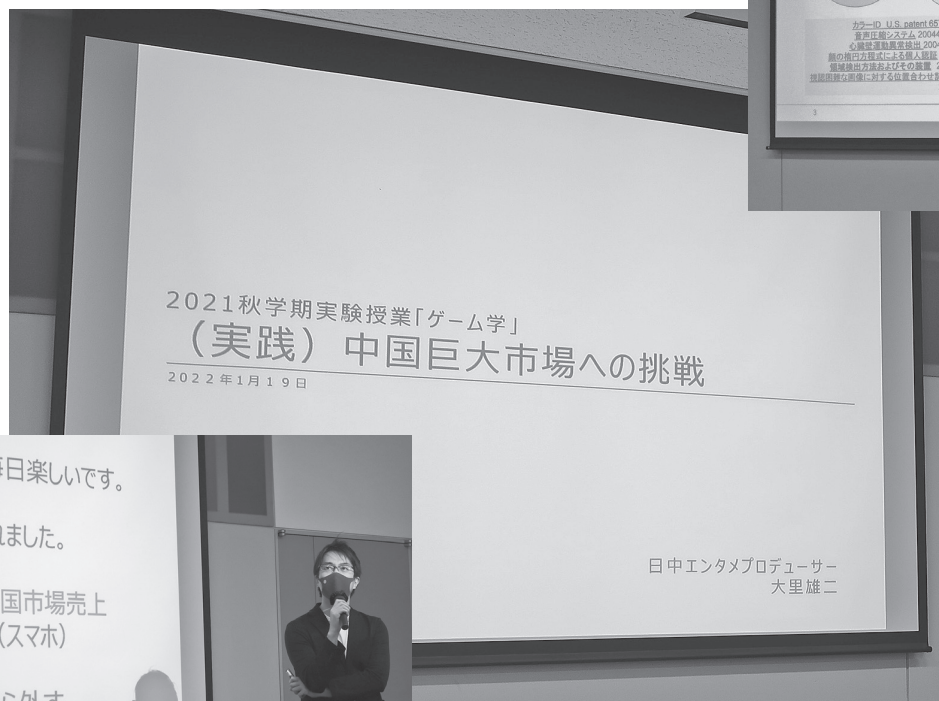
（山下一夫）



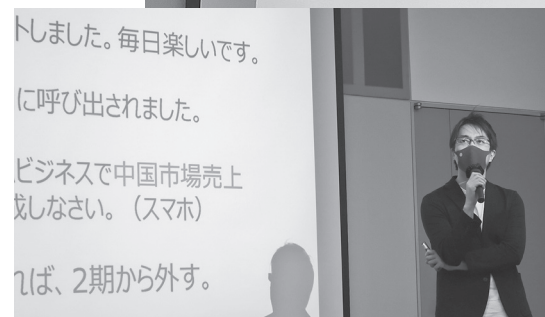
【2022年度 エンターテインメントビジネス論 スケジュール・担当講師（予定）】

- 5月10日 エンターテインメントビジネスの全体像（中山淳雄）
- 5月17日 インタビュー①：メディアミックスプロジェクト（中山淳雄）
- 5月24日 インタビュー②：ソードアートオンライン分析（中山淳雄）
- 6月7日 日本と中国のアニメーション（山下一夫）
- 6月14日 中国語圏映画におけるゲームの可能性（吉川龍生）
- 6月21日 日本のアニメビジネスとアジア（三原龍太郎）
- 6月28日 総合討論（山下一夫・中山淳雄・三原龍太郎・吉川龍生）

※肩書は2022年3月現在



大里雄二氏（日中エンタメプロデューサー）



日中エンタメプロデューサー
大里雄二

「情報の教養学」(2021年度秋学期)

2021年度秋学期の「情報の教養学」では、約2年ぶりに対面で3件の講演を実施しました。まず、伊藤公平塾長は、ご自身の研究や留学などの経験、塾内のQ HubやAICの取り組みなど、裏話を交えながら様々な話題を取り上げました。そして、最後に、塾生への期待をメッセージとして、世界に視野を広げて羽ばたくように、と結びました。次に、岩波敦子氏(理工学部教授)は、歴史学における情報を議論しました。仮に歴史上の事実は変わらなくても、その伝え方によっては、イメージが変わるし、フェイクニュースにもなりうると述べました。ルネサンス、ニュートン、ケインズなどを例としてとりあげました。最後に、杉浦孔明氏(理工学部准教授)は、人工知能や深層学習を含んだ機械知能に関する様々な研究事例を紹介し、さらに機械知能が発展していくための方向性として意味の扱いや説明可能



性を取り上げ、今後について議論しました。コロナ禍の中での対面発表であったため、人数制限などを設ける必要がありましたが、参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。2022年度は、春・秋3件ずつ講演を対面で実施する予定です。

(高田眞吾)

※肩書は2022年3月現在

日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画

教養の一貫教育2021 Vol.4:吉増剛造×空間現代詩と音楽の交差するところ

(2021年10月15日(金) 15:15 p.m.~17:30 p.m.)

大学教養研究センターが高等学校と共同して立ち上げた「教養の一貫教育」Vol.4は、第1回をご担当いただいた吉増剛造氏にふたたびご出演いただき、空間現代とのコラボレーションというかたちでパワーアップして戻ってきました。コロナ禍で開催が直前まで危ぶまれましたが、入場人数を事前予約制・大幅制限したかたちで、有観客で開催することができました。声と音の通路の切り結び。/(スラッシュ)のズレ、段差、切断。南三陸・志津川町の塾有林を使用した、杉の柔らかなみずみずしさの立ちあがる東北の記憶に寄り添うホールで3・11の災厄を経た杉の水脈を辿って、東日本大震災の記憶と真摯に向き合ってきた吉

増剛造氏は空間現代の音楽と切り結びながら、若林奮遺贈の榎で全力で霊鎮め/悪魔祓いをしました。学生のなかには内臓のなかで音の余韻が会の後も続き、興奮して夜も眠れなかったという声も聞きました。高校生の内面のなかに芽生えた一本のみずみずしい樹が、今後時間をかけて生育してくれることを、近くでは触れずに、教職員としてそっと遠くから見守りたいと思っています。

(担当:古川晴彦+小菅隼人)



ライブラリーコンサート2021

日吉メディアセンターでは、10月15日にジャズ、10月20日に弦楽四重奏のライブラリーコンサートを開催しました。コンサートは2016年度からの恒例開催で、塾生にとって日常的な図書館の中で本格的な生演奏を聴ける機会として、第一線で活躍中の演奏家の方々が引き受けてくださっています。

昨年度に引き続きコロナ禍の影響を受け、観客席は少数しか設けられませんでした。館内の各所から立ち見て熱心に聴き入る塾生が多く見られました。また、

YouTubeライブ配信も行い、多数の視聴がありました。両日とも終了後は演奏者に熱心に話しかけに行く塾生たちの姿があり、間近でプロの演奏に触れる刺激や、芸術への関心のきっかけを提供できたのではないかと考えています。



(日吉メディアセンター 今井星香)

「研究の現場から」

第32回「幼児教育のエスノグラフィ」

「子どもたちがどのように社会・文化に適したメンバーになっていくのか」そして、「その社会化・文化化の過程に幼稚園・保育所・教育がどのような役割を担っているのか」。これらの問いに対して、比較教育学・文化人類学・社会心理学・発達心理学・教育社会学など様々な学問分野をまたいで、研究をしています。発表前半では、幼稚園や保育所が子どもの育ちに果たす役割について考察しました。「見守る」「甘え」「思いやり」など、日本人の日々の生活に根付き、馴染みのある言葉・概念が、日本の幼児教育現場での実践において、どのような意味を持つのかを明らかにしました。例えば、教師が子どもたちのケンカに介入しない様子は、アメリカの幼児教育者の目には「何もしていない」と映ることが多いのですが、日本の幼児教育者は「見守っている」と語ることが多いのです。「見守る」ことで、子どもたちに自分たちでケンカを解決する機会を与えていると考えています。発表後半では、教師の実践から離

れ、子どもの育ちそのものに焦点を当てた「グループ・マッシュマロ課題」研究について発表しました。幼児教育において、国・地域により実践の違いが指摘されており、子ども達は異なる環境で社会化の過程を経ていることがわかっています。そのような子ども達が、グループで課題に取り組むとき、取り組み方は同じなのか、違うのか、日米比較により検討しています。この研究は、事前調査が終了した段階で、今春に本格的に開始予定です。当日は、ご参加くださった様々な専門の先生方から貴重なご意見を頂きました。改めて心より感謝申し上げます。

(林 安希子)

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野や関心事を話し、軽やかな雰囲気の中で懇話する会です。学部や分野を越えての交流も深められます。

第三十二回 11月24日(水) 18:15~20:00 Zoom開催
林 安希子(教育学部 専任講師)
「幼児教育のエスノグラフィ」

日常キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに斬新なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教職研究センターは考えます。
*お申し込みは、高橋宣也(文) nobuyuki@keio.jpまで事前にご連絡ください。

主催：教職研究センター keio-rcs@libarts.keio.ac.jp

第33回

「クリスマスタイムのジェイムズ・ジョイスへ」

2021年12月22日の「研究の現場から」は、18時15分から20時まで、オンラインで開催されました。間近に迫る英語モダニズム文学「奇跡の年」100周年(=2022年)の話から始めて、クリスマスの時期にふさわしいジョイスの傑作中篇『The Dead』を、末尾を『The Dead』で飾る短篇集『Dubliners』のクライマックスとして読み解きました。

中心テーマをなにかば隠すように提示する作家であるジョイスの意図を浮かび上がらせるために、いくつかの補助線を引きました。同短篇集におさめられた『The Sisters』、『A Painful Case』、『Grace』といった他の作品との関係をまず押さえた上で、とくに『The Dead』の直前におかれた『Grace』の結尾部分に見られるDouay英訳聖書を用いた『ルカ福音書』からの引用に注目して、マリア受胎告知を描いた泰西名画の図像解釈もまじえながら、受胎告知に縁の深いLilyという名の登場人物で始まる『The Dead』

において「神の恩寵Grace」がどのように表されているかを明らかにしました。次から次へと描かれた不条理な世界が、短篇集最後の作品『The Dead』で、マリアに神の子の受胎を告げる大天使Gabrielの名を持つ主人公が経験するスピリチュアルな変容を通して浄化されてゆく様子を示しました。

ジョイスの専門家をはじめとする英文学者のみならず、ドイツ、フランス、ロシア、中国、日本とさまざまな国を専門領域とする多彩な研究者の参加を得、実にさまざまな質問そしてコメントをたまわり、英文学の学会ではあり得ない、まさに日吉の「研究の現場」らしい色とりどりの賑わいを楽しみました。

(武藤浩史)

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野や関心事を話し、軽やかな雰囲気の中で懇話する会です。学部や分野を越えての交流も深められます。

第三十三回 12月22日(水) 18:15~20:00 Zoom開催
武藤 浩史(法学部 教授)
「クリスマスタイムのジェイムズ・ジョイスへ」

日常キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに斬新なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教職研究センターは考えます。
*お申し込みは、高橋宣也(文) nobuyuki@keio.jpまで事前にご連絡ください。

主催：教職研究センター keio-rcs@libarts.keio.ac.jp

予告 第34回 研究の現場から

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気なかで語り合う催しです。

慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。

(高橋宣也)

■予 定：6月~7月に1回 Zoom 開催 (予定)

■講 師：文学・文化領域専門の慶應義塾大学教員

■要申込：要

■料 金：無料

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

<p>【全体ガイダンス】(オンデマンド配信) 4月1日(金)～14日(木)</p> <p>【情報の教養学】第1回：福井健策 メタバース(仮想世界)のルールと権利講座 4月20日(水) 16:30～18:00</p> <p>読書会「晴読雨読」第1回：ジョナサン・ディル 4月20日(水) 15:00～</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第1回 4月29日(金・祝) 17:00～19:00</p> <p>読書会「晴読雨読」第2回：ジョナサン・ディル 5月31日(火) 15:00～</p> <p>【HAPP】松下里沙子メイクアップ講座 「コロナを超えて：マスク時代のメイクアップ」 6月8日(水) 16:30～18:30</p> <p>【学会・ワークショップ等開催支援】 国際シンポジウム：佐藤元状 「濱口竜介監督『ドライブ・マイ・カー』をめぐって」 6月18日(土) 時間未定</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第4回 7月29日(金) 17:00～19:00</p> <p>【HAPP】笠井叡舞踏公演 日時未定</p> <p>【HAPP】教養の一貫教育Vol.5「吉増剛造×佐野元春 詩と音楽の交差するところII」(仮) 9月28日(水) 15:15～17:30</p> <p>【HAPP】日吉音楽祭2022 10月8日(土)、11月6日(日) 時間未定</p>	<p>4月</p> <p>5月</p> <p>6月</p> <p>7月</p> <p>8月</p> <p>9月</p> <p>10月</p> <p>11月</p>	<p>【「学び場」プロジェクト】 4月18日(月)～7月15日(金)</p> <p>【情報の教養学】第2回：伊藤公平 「情報に踊らされず、世界を平和に導く！」 4月27日(水) 16:30～18:00</p> <p>【HAPP】ライブラリーコンサート2022 5月20日(金) 15:00～、5月25日(水) 15:00～</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第2回 5月27日(金) 17:00～19:00</p> <p>【HAPP】能の流派—謡と仕舞(仮) 6月11日(土) 14:00～16:00</p> <p>【情報の教養学】第3回：土屋大洋 「サイバーグレートゲーム：デジタル技術が変える 国際政治」 6月20日(月) 16:30～18:00</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第3回 7月1日(金) 17:00～19:00</p> <p>【庄内セミナー】 8月30日(火)～9月2日(金)</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第5回 9月30日(金) 14:00～17:00</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第6回 10月28日(金) 17:00～19:00</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第7回 11月25日(金) 17:00～19:00</p>
--	---	--

※活動予定は中止・延期となる可能性があります。

私の(古)書自慢

自慢をするなど教えられて育ってきましたが、これだけは自慢しない訳にはいきません。私の自慢は、古書蒐集です。古書蒐集は私の最高の健康法でもあるのです。これを正当な健康法とみなす理由は幾つもあります。コロナ禍で一層加速したオンライン重視の生活は、ある意味ではその便利さゆえに、うっかり形ある「モノ」についてのあの人間らしい感覚を鈍らせてしまう側面もあるのではないのでしょうか。こんな中、散歩がてら(客もまばらな)古書店にふらっと立ち寄るだけで不思議と生きた心地がしてくるものです。嗚呼、人間とは何と原始的な生き物なのでしょう。たとえ世界を自由に旅することが叶わなくとも、廉価で掘り出した100年以上前の書物を手にとり、目に優しい紙色や文字の質感を味わい、芳ばしい過去の薫りに溜息をつき、前の所有者の残した痕跡から幸せな別の人生を想像することができるのも、そこに「モノ」があってこそです。近代イギリス文学を研究する私にとって、このような古書たちとの一期一会の邂逅は確実に手の届く生きた教養であり「永遠の悦び」に他なりません。それに、古くて新しいこの健康法にもし欠点があるとしても、古書自慢に割く紙幅と一緒に自室と研究室の書棚のスペースがなくなるくらいなのです。

(理工学部 石川大智)

